

マンスリー・アウトLOOK(2023/10)

24 年 3 月までの為替相場展望(アップデート)

本レポートは、23 年 9 月 25 日配信の「マネースクエア四季報」で提示した 24 年 3 月末までの為替相場見通しをアップデートしたものです。

過去 1 カ月間(9/29-10/27)、主要通貨(Bloomberg による 17 通貨)の騰落率で、最上位はスイスフラン、次いで南アフリカランド、米ドルはブラジルレアルに次いで 4 位でした。ユーロや円、そして英ポンドが続き、豪ドル、カナダドル、トルコリラ、NZドルは下位に沈みました。

多くの中央銀行が利上げサイクルの終盤に差し掛かるなか、市場の関心は高金利をいつまで維持するか、換言すれば利下げのタイミングはいつかにシフトしていきそうです。そして、日銀がいつ金融緩和を修正するかも大きなポイントでしょう。

24年3月までの予想レンジ

通貨ペア	直近終値(10/27)	予想レンジ	方向性
米ドル/円	149.660	135.000 ~ 155.000	レンジ
ユーロ/円	158.110	150.000 ~ 165.000	レンジ
ユーロ/米ドル	1.05650	1.02000 ~ 1.13000	レンジ
ユーロ/英ポンド	0.87155	0.84000 ~ 0.90000	レンジ
英ポンド/円	181.420	165.000 ~ 195.000	レンジ
英ポンド/米ドル	1.21220	1.15000 ~ 1.35000	レンジ
豪ドル/円	94.808	90.000 ~ 100.000	レンジ
豪ドル/米ドル	0.63350	0.60000 ~ 0.69000	レンジ
豪ドル/NZドル	1.09020	1.05000 ~ 1.11000	レンジ
NZドル/円	86.960	83.000 ~ 90.000	レンジ
NZドル/米ドル	0.58106	0.55000 ~ 0.64000	レンジ
カナダドル/円	107.900	103.000 ~ 113.000	レンジ
米ドル/カナダドル	1.38700	1.30000 ~ 1.40000	レンジ
トルコリラ/円	5.308	4.000 ~ 7.000	下落
南アフリカランド/円	7.944	7.000 ~ 8.500	レンジ
メキシコペソ/円	8.262	8.000 ~ 9.000	レンジ

※予想レンジと方向性は、担当者個人がファンダメンタルズ分析やテクニカル分析などを基にして独自に判断したものであり、予告なく変更になる場合があります。

※最終的な投資判断はご自身で行っていただきますようお願いいたします。

24 年 3 月までの重要なテーマは「循環の円高 vs 構造の円安」。金融政策の方向性の差など循環面は、昨年春以降の円安要因から円高要因に転換しそうです。一方で、90 年代半ばに始まった円安の大きなトレンドは日本経済の地盤沈下、少子高齢化を背景としており、今後も継続するでしょう。「循環の円高 vs 構造の円安」の帰結は、短期的には循環面の円高が意識される局面が増える一方で、構造面での円安圧力によって円高の頭が抑えられる形になりそうです。

グローバルなショック・イベントには要注意でしょう。ロシア・ウクライナ、あるいはイスラエル・パレスチナに関連して地政学リスクが高まらないか。また、中国における不動産不況が国民の不満を高める結果、当局が対外的に強硬姿勢をとる可能性はありそうです。〈西田〉

米ドル/円:135.000 円~155.000 円

日米の金融政策の方向性の違いが逆転するかどうか最大のポイントでしょう。FRB はインフレ抑制姿勢を堅持しつつも、今年 7 月の利上げをもって利上げサイクルが打ち止めとなった可能性があります。市場では 24 年半ばごろに FRB が利下げを開始するとの観測が有力です。インフレの鈍化ペースはややスローダウンしており、市場の利下げ観測はやや時期尚早の感もありますが、果たして経済・物価情勢がそうした観測を裏付ける方向に変化するかどうか。

一方、日銀は 24 年春にも従来の金融緩和を修正するとみられています。YCC(イールドカーブ・コントロール)の修正・撤廃やマイナス金利の解除に向けて、23 年中にも地ならしが行われる可能性がありそうです。

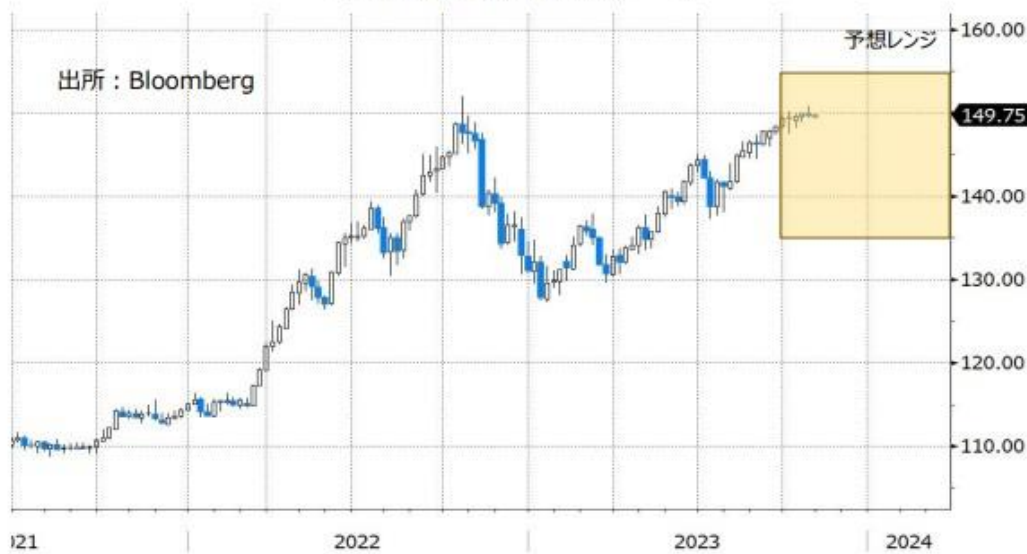
日米の長期金利(10 年物国債利回り)も重要なカギを握りそうです。FRB の利上げ観測が後退するなかでも、米長期金利は上昇を続けており、一時 16 年ぶりの 5%台を示現しました。財政赤字の拡大や FRB による QT(量的引き締め=保有国債の削減)など、国債需給の悪化を反映した面があります。そうした「悪い金利上昇」は、中長期的には当該通貨のサポート材料にはなりにくいですが、短期的には米ドル高要因となりうるでしょう。

一方、日銀の金融緩和修正の観測から日本の長期金利もジリジリと上昇しています。YCC の修正(やその観測)によって長期金利は 1%を超えて上昇するかもしれません。ただし、7 月中旬以降、米長期金利が日本の長期金利の 2 倍のペースで上昇しました。そうした状況に大きな変化がなければ、日米長期金利差(日<米)は拡大し、米ドル/円の上昇要因となりそうです。〈西田〉

注目点・イベントなど

- ・FRB の打ち止め⇒利下げ転換の観測が強まるか。
- ・日銀は金融政策の正常化に向けて動き出すか。
- ・米長期金利は一段と上昇するか。日本の長期金利は 1%を超えて上昇するか。
- ・中国の不動産危機がグローバルなリスクオフをもたらさないか。

米ドル/円 (週足、2021/7 -)



ユーロ/円: 150.000 円 ~ 165.000 円

ユーロ/米ドル: 1.02000 米ドル ~ 1.13000 米ドル

ユーロ/英ポンド: 0.84000 ポンド ~ 0.90000 ポンド

ユーロ/円をユーロ/米ドルと米ドル/円に分解し、それぞれとユーロ/円の相関係数を求めると(※)、ユーロ/円の動きは圧倒的に米ドル/円の動きで説明されることがわかります。

(※) 23 年 1-10 月の週次データで、ユーロ/円とユーロ/米ドルの相関係数は 0.09、ユーロ/円と米ドル/円の相関係数は 0.94。

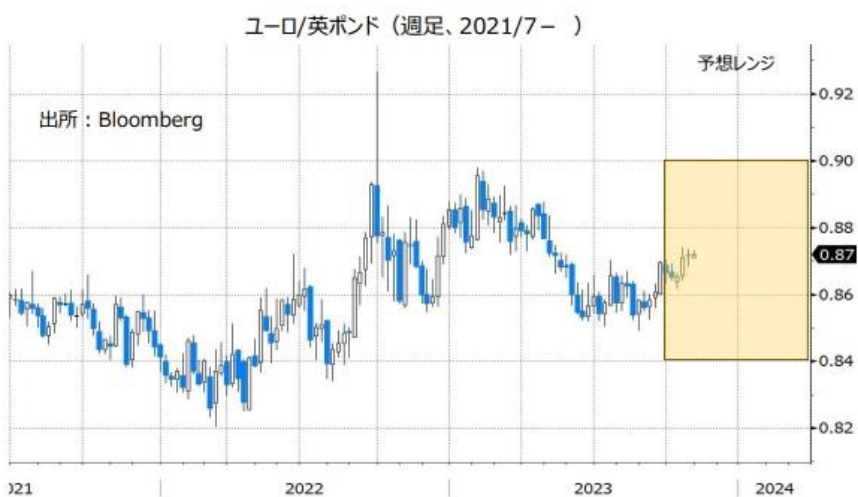
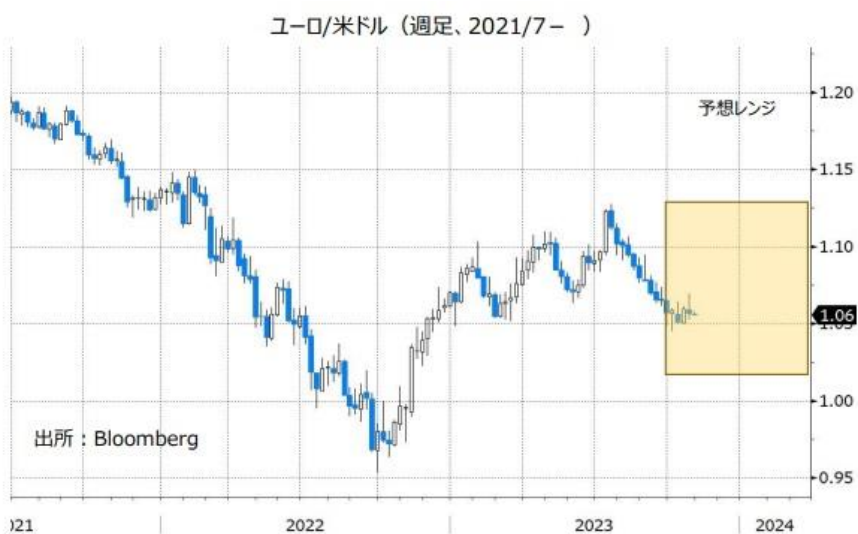
FRB も ECB もすでに利上げサイクルが終了した可能性があります。そうであれば、市場の関心は徐々に「利下げのタイミングはいつか」にシフトしそうです。10 月 27 日時点の OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、市場のメインシナリオでは、ECB の利下げ開始が 24 年 4 月で、10 月までに 3 回の利下げ。一方、FRB は 6 月に利下げ開始で、9 月に 2 回目の利下げです。そうしたタイミングの違いはユーロ/米ドルにとってマイナスとなりそうです。ただし、より重要なのは市場の観測がどのように変化するかでしょう。FRB(FOMC)や ECB からのメッセージには要注意でしょう。

ユーロ圏内の足並みの乱れは、ユーロの弱気材料になるかもしれません。現在のように景気が大きく鈍化する局面では各国の財政状況の違いに市場が注目する可能性があります。イタリアやスペインなど財政赤字が大きい国とドイツやオランダなど小さい国との長期金利の差が一段と拡大しないか。また、ECB 内部でハト派とタカ派の見解相違が明確にならないか。そうした点にも注目する必要があるようです。

ユーロ/英ポンドは 16 年の英国の国民投票(ブレグジット決定)以降、0.825 ポンド ~ 0.925 ポンドを中心としたレンジで推移してきました。10 月 27 日時点でユーロ/英ポンドは同レンジのほぼ中心に位置しています。ユーロ圏と英国は金融政策(利上げ打ち止め)や景気(停滞)の位相が似通っており、同レンジ内での推移が続きそうです。〈西田〉

注目点・イベントなど

- ・ユーロ圏景気の行方やインフレ動向。景気下振れリスクが一段と鮮明になるか。
- ・ECB 内のタカ派とハト派の議論がどちらに傾くか。
- ・ドイツやオランダと、イタリアやスペインとの長期金利差が拡大しないか。



英ポンド/円:165.000 円～195.000 円

英ポンド/米ドル:1.15000 米ドル～1.35000 米ドル

英国のインフレ率(CPI前年比)はやや鈍化してきたものの、総合、コア(エネルギー・食料・アルコール飲料・タバコを除く)とも9月に6%台と、主要先進国の中でも高さが目立っています。一方で、景気は停滞しているようです。

BOE(英中銀)は、インフレ抑制に向けて強い姿勢で臨んでいましたが、ここへきてトーンダウンしています。BOEは23年終盤から24年にかけてインフレ率が顕著に鈍化するとの見通しに自信を持っているようです。OISによれば、市場のメインシナリオでは、ECBやFRBと同様にBOEも利上げサイクルはすでに終了しています。ただ、24年1月までに追加利上げが3割近い確率で織り込まれています。今後、BOEの見通し通りにインフレ率が顕著に鈍化するようであれば、追加利上げ観測が一段と後退することで、英ポンドに下押し圧力が加わりそうです。

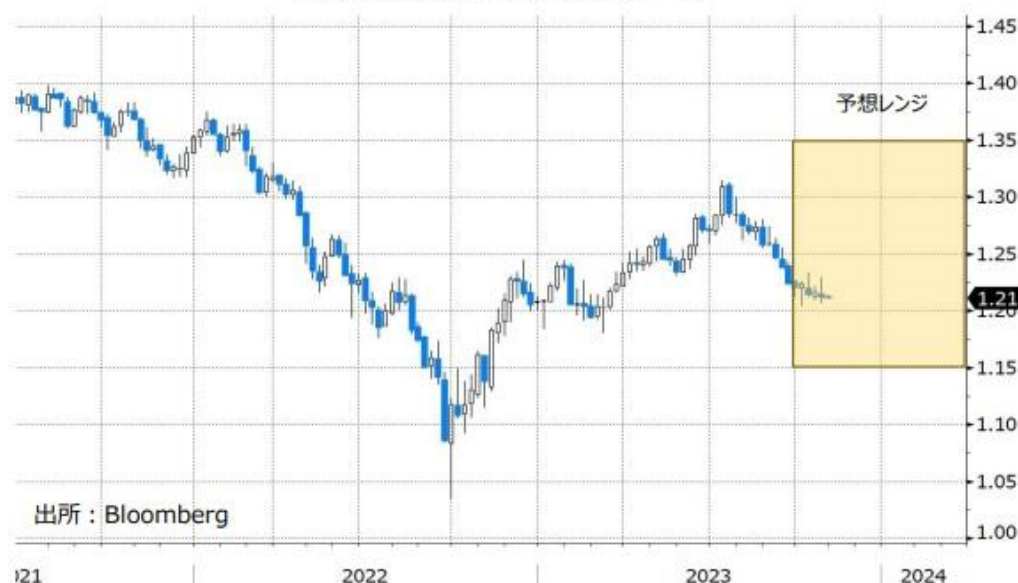
英国の雇用者数は3カ月平均で8月まで3カ月連続で減少しています。BOEが強く懸念してきた賃金とインフレのスパイラルは解消に向かうかもしれません。BOEの金融政策にとって、労働市場や賃金の動向が重要な判断材料となりそうです。＜西田＞

注目点・イベントなど

- ・英国の労働市場動向。賃金の伸びが鈍化するか。
- ・インフレ率が、BOE見通し通り23年末～24年にかけて「顕著に」鈍化するか。
- ・BOEの金融政策見通し(24年1月までに3割程度の確率で利上げ予想)に変化は生じるか。



英ポンド/米ドル (週足、2021/7 -)



豪ドル/円: 90.000 円 ~ 100.000 円

豪ドル/米ドル: 0.60000 米ドル ~ 0.69000 米ドル

豪ドル/NZドル: 1.05000NZドル ~ 1.11000NZドル

RBA(豪中銀)では、9月にブロック氏が総裁に就任しました(副総裁から昇格)。10月3日にブロック総裁の下で初めての政策会合が開催され、政策金利を4.10%に据え置くことが決定されました。据え置きは4会合連続です。

10月会合の議事録やブロック総裁の発言をみると、ロウ前総裁と比べてブロック総裁はタカ派的かもしれません。議事録では「インフレ率の目標への回帰が現在の(RBAの)予想よりも遅れることに対する理事会の許容度は低い」が追加されました。ブロック総裁は10月24日の講演で「インフレ見通しに大幅な上方修正があれば、追加利上げを躊躇(ちゅうちょ)しない」と述べました。

豪州の7-9月期のCPIは総合指数が前年比5.4%、トリム平均値が同5.2%と、いずれも市場予想の5.3%と5.0%を上回りました。

市場ではRBAは11月7日の政策会合で追加利上げを行うとの観測が高まっており、市場の金融政策見通しを反映するOIS(翌日物金利スワップ)によれば、市場が織り込む11月会合の利上げの確率は約6割です(10/30午前11時時点)。

豪ドル/円や豪ドル/米ドルは目先、RBA会合の結果に大きく影響を受けそうです。主要国の中銀が政策金利を据え置く姿勢を示す中で、RBAが利上げすればインパクトは大きいと考えられます。豪ドル/円や豪ドル/米ドル、豪ドル/NZドルは上値を試す可能性があります。一方、RBAが11月会合で政策金利を据え置いた場合、豪ドルには下押し圧力が加わりそうです。

豪ドルは投資家のリスク意識の変化(リスクオン/リスクオフ)を反映しやすいという特徴もあります。主要国の株価が堅調に推移するなどしてリスクオン(リスク選好)の動きが強まる場合、豪ドル/米ドルや豪ドル/円の支援材料になりそうです。

【豪ドル/NZドル】

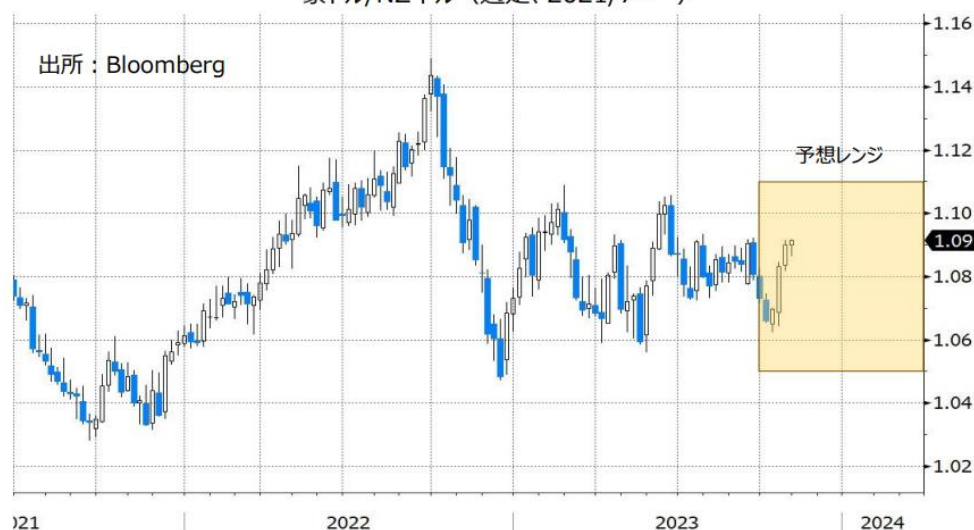
RBA が実際に利上げを行った場合、豪ドル/NZ ドルは上値を試す展開になるかもしれません。ただ、RBA が利上げを続けて RBNZ(NZ 中銀)との政策金利の差が大きく縮小する状況にならないければ、豪ドル/NZドルは次第に上値が重くなっていくと考えられます。＜八代＞

注目点・イベントなど

- ・RBA(豪中銀)は追加利上げをするのか。
- ・米 FRB と日銀の金融政策。
- ・投資家のリスク意識の変化。リスクオンは豪ドルの上昇要因。
- ・資源(主に鉄鉱石)価格の動向(資源価格の下落は豪ドルの下落要因)。
- ・中国経済の動向。中国経済の減速は豪ドルにとってマイナス材料。



豪ドル/NZドル（週足、2021/7- ）



NZドル/円: 83.000 円～90.000 円

NZドル/米ドル: 0.55000 米ドル～0.64000 米ドル

RBNZ(NZ 中銀)は、10 月 4 日の政策会合で政策金利を 5.50%に据え置きました。据え置きは 3 会合連続です。

10 月 17 日に発表された NZ の 7-9 月期 CPI(消費者物価指数)は前年比 5.6%と、RBNZ のインフレ目標(1～3%)を引き続き上回ったものの、市場予想の 5.9%や RBNZ の 8 月時点の見通しである 6.0%を下回りました。この結果を受けて市場では RBNZ の追加利上げ観測が後退しました。

11 月 29 日に年内最後の RBNZ の政策会合が開かれます。この会合では、四半期に 1 度の RBNZ の政策金利見通しが公表されます。前回 8 月は、現在的水準(5.50%)を下回る時期(利下げ開始時期)は 25 年 1-3 月期との見通しが示されました。新たに公表される政策金利見通しで、利下げ開始時期が前倒しされれば、NZドルの上値を抑える要因になると考えられます。

NZドル/米ドルは米 FRB の金融政策の、NZドル/円は日銀の金融政策の影響も受けそうです。FRB は政策金利を長期間にわたって高い水準を維持するとの観測が高まる、あるいは日銀が金融緩和策の修正へと動くケースでは、NZドル/米ドルや NZドル/円は軟調に推移する可能性があります。

豪ドルと同様に NZ ドルは、投資家のリスク意識の変化(リスクオン/リスクオフ)を反映しやすいという特徴があります。主要国の株価が堅調に推移するなどしてリスクオンが強まることは NZ ドルにとってプラス、反対にリスクオフが強まることは NZ ドルにとってマイナスです。＜八代＞

注目点・イベントなど

- ・RBNZ(NZ 中銀)の利上げサイクルは終了したかどうか。
- ・米 FRB と日銀の金融政策。

- ・投資家のリスク意識の変化。リスクオンは NZ ドルの上昇要因。
- ・中国経済の動向。中国経済の減速は NZ ドルにとってマイナス材料。
- ・乳製品 (NZ 最大の輸出品) 価格の動向 (乳製品価格の上昇は NZ ドルの上昇要因)。



カナダドル/円: 103.000 円～113.000 円

米ドル/カナダドル: 1.30000 カナダドル～1.40000 カナダドル

BOC(カナダ中銀)は、10月25日の政策会合で政策金利を5.00%に据え置きました。据え置きは2会合連続です。

BOCは声明で、「必要なら、政策金利をさらに引き上げる用意がある」と改めて表明。追加利上げに含みを持たせました。声明は一方で、「これまでの利上げが(カナダの)経済活動を抑制し、インフレ圧力を緩和させているという証拠が増えている」と指摘。23年と24年のGDP成長率はそれぞれ1.2%と0.9%との見通しを示し、7月時点の1.8%と1.2%から下方修正しました。

また、マックレム BOC 総裁は 10 月 26 日のラジオインタビューで、「(カナダの)景気はもはや過熱していない。インフレが BOC の予想通りに低下すれば、さらに利上げを行う必要はないだろう」と述べました。

BOCの政策会合とマックレム総裁の発言を受けて、市場では“BOCの利上げサイクルは終了し、次の一手は利下げ”との見方が強まりました。今後発表されるカナダの経済指標でこの見方が一段と強まる場合、カナダドル安圧力が加わりやすくなるかもしれません。

米FRBと日銀の金融政策にも注目です。FRBは政策金利を今後も据え置くとの観測が市場で一段と高まれば米ドル/カナダドルは上値を試し、また日銀が金融緩和策の修正へと動けばカナダドル/円は下値を試す展開になる可能性があります。

原油価格(米WTI原油先物が代表的な指標)に大きな変動がみられれば、原油価格の動向が材料になりそうです。カナダは原油を主力輸出品とするため、原油価格が上昇を続ければ、カナダドルを下支えるかもしれません。＜八代＞

注目点・イベントなど

- ・BOC(カナダ中銀)の利上げサイクルが終了するかどうか。
- ・米FRBと日銀の金融政策。
- ・資源(特に原油)価格の動向(資源価格の上昇はカナダドル高要因)。



トルコリラ/円:4.000 円～7.000 円

TCMB(トルコ中銀)は 10 月 26 日の政策会合で、5.00%の利上げを行うことを決定。政策金利を 30.00%から 35.00%へと引き上げました。利上げは 5 会合連続です。

TCMB は声明で「金融引き締めは、インフレ見通しの大幅な改善が達成されるまで、タイムリーかつ段階的な方法で必要なだけさらに強化される」と改めて表明。追加利上げを示唆しました。6 月以降の TCMB の利上げ幅は合計 26.50%です。インフレの抑制に向けて TCMB が積極的な利上げを続けていることは、トルコリラにとってプラスと考えられます。

ただし、トルコの実質金利(政策金利から CPI 上昇率を引いたもの)は依然として大幅なマイナスです(10/27 時点でマイナス 26.53%)。エルドアン・トルコ大統領は TCMB の利上げを容認しているようですが、トルコでは 24 年 3 月に統一地方選が行われる予定です。統一地方選に向けてエルドアン大統領が考えを改めないか、TCMB に対して再び利下げを要求するようになるのではないか、との懸念があります。トルコリラが持続的に上昇するためには、TCMB が今後も適切に利上げをできるかどうか、エルドアン大統領が金融政策に介入しないこと、これらが必要と考えられます。〈八代〉

注目点・イベントなど

- ・TCMB(トルコ中銀)は適切に利上げできるか。
- ・エルドアン大統領は金融政策に干渉しないか。
- ・トルコの外貨準備は枯渇しないか。



南アフリカランド/円:7.000 円～8.500 円

SARB(南アフリカ中銀)は、7 月と 9 月の 2 会合連続で政策金利を 8.25%に据え置きました。クガニャゴ SARB 総裁は 9 月会合後の会見で、「インフレ見通しに対する上振れリスクは残っている」とし、「SARB は引き続き警戒しており、リスクが顕在化し始めれば行動する用意がある」と表明。追加利上げに含みをもたせました。

南アフリカの9月CPI(消費者物価指数)は前年比5.4%と、3カ月連続でSARBのインフレ目標(3~6%)内に収まりました。市場では、SARBの次の一手は利上げではなく利下げになるとの観測があります。今後、利下げ観測が高まる場合、南アフリカランド/円は上値が重くなる可能性があります。

南アフリカでは発電設備の老朽化などによって計画停電が常態化しています。停電は経済活動を阻害するため、計画停電がさらに続く場合には同国景気をめぐる懸念が市場で強まる可能性があります。

<八代>

注目点・イベントなど

- ・SARB(南アフリカ中銀)の利下げ観測が強まるか。
- ・計画停電が続く場合、南アフリカランド/円の下押し要因になる可能性あり。



メキシコペソ/円: 8.000 円~9.000 円

BOM(メキシコ中銀)は、9月の政策会合まで4会合連続で政策金利を11.25%に据え置きました。9月の会合時の声明では「政策金利を現在の水準に長期間維持する必要がある」とし、政策金利は当面据え置かれることが示唆されました。

BOMの政策金利はFRBなどの主要中銀と比べて高い状況です。また、メキシコの実質金利(政策金利からCPI上昇率を引いたもの)は大幅なプラスです(10/27時点で6.80%)。CPI上昇率(9月は前年比4.45%)がBOMのインフレ目標である3%に向かって鈍化を続けられれば、BOMは利下げを検討し始めるかもしれません。ただ、仮に利下げが実施されるとしても、政策金利が高いことや実質金利が大幅なプラスである状況に大きな変化はないと考えられ、そのことがメキシコペソを下支えしそうです。

日銀の金融政策にも目を向ける必要がありそうです。日銀がマイナス金利の解除など金融緩和策の修正へと動けば、メキシコペソ/円は上値が重くなる可能性があります。

原油価格(米WTI原油先物)が大きく変動する場合、原油価格の動向も材料になるかもしれません。原油価格が上昇を続けられれば、メキシコペソにとってプラスになりそうです。<八代>

注目点・イベントなど

- ・主要国と比べて高いメキシコ中銀の政策金利と実質金利。
- ・BOM(メキシコ中銀)はいつまで政策金利を据え置か。
- ・資源(特に原油)価格の動向(資源価格の上昇はメキシコペソ高要因)。



今週の主要経済指標・イベント

			当社予想	市場予想	前回値
10月30日	18:00	【独】GDP速報値 前期比(7-9月期)	-0.1%	-0.2%	0.0%
	22:00	【独】EU基準CPI速報値 前年比(10月)	3.6%	3.3%	4.3%
10月31日	正午頃	【日】日銀金融政策(「経済・物価情勢の展望」公表)			
	15:30	【日】植田日銀総裁会見			
	19:00	【ユーロ圏】GDP速報値 前期比(7-9月期)	0.0%	0.0%	0.1%
	19:00	【ユーロ圏】CPI速報値 前年比(10月期)	4.3%	4.2%	4.5%
	23:00	【米】消費者信頼感指数(10月)	101.0	100.0	103.0
11月1日	6:45	【NZ】失業率(7-9月期)	3.9%	3.9%	3.6%
	23:00	【米】ISM製造業景況指数(10月)	48.0	49.0	49.0
	27:00	【米】FOMC政策金利	5.25-5.50%	5.25-5.50%	5.25-5.50%
	27:30	【米】パウエルFRB議長会見			
11月2日		【メキシコ】祝日(死者の日)			
	21:00	【英】BOE政策金利	5.25%	5.25%	5.25%
		【英】BOE議事録・金融政策報告			
	21:30	【英】ペイリーBOE総裁会見			
11月3日		【日】祝日(文化の日)			
	16:00	【トルコ】CPI 前年比(10月)	63.00%	62.30%	61.53%
	21:30	【米】非農業部門雇用者数 前月比(10月)	9.0万人	15.0万人	33.6万人
		【米】失業率(10月)	3.8%	3.8%	3.8%
	21:30	【カナダ】雇用者数 前月比(10月)	1.50万人	2.00万人	6.38万人
		【カナダ】失業率(10月)	5.6%	5.6%	5.5%
	23:00	【米】ISM非製造業景況指数(10月)	52.5	53.0	53.6
11月5日		【米】サマータイム終了			

市場予想はBloomberg、10月30日9:00現在。発表日時は日本時間。

<執筆者>

執筆者プロフィール



西田 明弘（にしだ あきひろ）

チーフエコノミスト

日興リサーチセンター、米ブルッキングス研究所、三菱UFJモルガンスタンレー証券などを経て、2012年マネースクウェア・ジャパン（現マネースクエア）入社。

米国を中心とした各国のマクロ経済・金融政策・政治動向の分析に携わる。

「アナリスト、ストラテジスト、エコノミスト、研究員と呼び名は変われども、30年以上一貫してリサーチ業務を行ってきました。長い経験を通じて学んだことは、金融市場では何が起きても不思議ではないということ。その経験を少しでも皆さんと共有したいと思います。」

執筆者プロフィール



八代 和也（やしろ かずや）

シニアアナリスト

2001年ひまわり証券入社後、為替関連の市況ニュースの配信、レポートの執筆などFX業務に携わる。2011年、マネースクウェア・ジャパン（現マネースクエア）に入社。

豪ドル、NZドル、カナダドル、トルコリラ、南アフリカランド、メキシコペソを中心に分析し、レポート執筆のほか、M2TV出演、セミナー講師を務めている。

【プロフィール】 広島県出身。

【趣味】 野球・サッカー観戦。

【一言】 より分かりやすくタイムリーなレポートを心掛けています。

※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。また、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引や取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ-100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
